

# 袈裟の心を結んで世界平和の実現を

## ——韓国・通度寺へ袈裟贈呈——

善光寺海外留学僧派遣育英会理事

東 隆 眞

このたび、わが善光寺海外留学僧派遣育英会は、大韓民国、靈鷲山通度寺方丈老天下猊下の御要請により、同寺に袈裟（金欄九条衣一肩、金欄安陀会一肩、麻九条衣一肩、麻安陀会一肩）と道元禅師撰述『正法眼蔵』九五卷（大本山永平寺蔵版。和装本四帙二一巻。桐箱入）を贈呈した。

周知のとおり、慶尚南道の靈鷲山通度寺（慶南梁山郡下北面芝里五八三）は、大韓仏教曹溪宗二五本山の一であり、三大寺刹の一でもある。

三大寺刹とは、仏宝、法宝、僧宝の三宝の三つに寺院をあてはめて言う。通度寺は仏宝の寺、法宝の寺が海印寺、僧宝の寺が松広寺である。いずれも二五本山の一である。

通度寺が仏宝宗刹と呼ばれる名刹であるゆえんは、仏舍利が奉安されてあるからである。通度寺の大雄殿（本堂にあたるか）の真正面には「金剛戒壇」の大額がかかっている。しかし、この堂宇にはご本尊は祀られていない。その奥に石造の戒壇があり、仏舍利塔があるのである。

仏舍利塔には、釈尊の御真骨が祀られているという。通度寺は、六四六年ごろ、新羅の慈藏律師によって創建された。律師は入唐して、五台山や終南山で、仏舍利や仏袈裟を授けられて帰国した。通度寺には、律師所用の袈裟とともに「釈迦如来袈裟」とよばれる釈尊の袈裟が秘蔵されている。山号の靈鷲山は、通度寺の背後にある山容が似ているところから名づけられたのであるが、もともとインドの王舎城の東北にある山で、そのむかし、釈尊はこの山頂で説法をなさった。すなわち、通度寺は仏舍利塔の古刹であり、仏袈裟の大藍である。朝鮮半島における釈尊のお寺であり、釈尊が現に生きて説法まします道場であると言ってもよからう。

この仏宝宗刹の通度寺から、直接には通度寺聖宝博物館長・釈梵河老師を介して、方丈・老天月下猥下が、善光寺海外留学僧派遣育英会黒田武志理事長に日本の袈裟を歓迎したい希望が

寄せられた。

通度寺には、かねてより、世界各地の袈裟を一堂に集め、世界の袈裟を展示し、袈裟のころを通じて、世界の仏教徒が交流し、協力する一大拠点を設け、さらに宇宙、人類の平和に広げていきたいという誓願がある。

黒田武志理事長は大韓仏教曹溪宗と法脈を同じくする日本の曹洞宗に所属し、曹洞宗の宗祖（高祖道元禪師、太祖瑩山禪師）を通じて、釈尊の精神に還れという誓願を発して、独自の実践活動を展開している。また、これまでも、日本における仏舍利奉戴や袈裟の普及、顕揚について多大の貢献があった。また、育英会では韓国人の仏教留学僧六名を育英生として採用してきた。

日本の曹洞宗の兩大本山の一、吉祥山永平寺の開山・道元禪師は、日本仏教において、とくに釈尊を尊敬し、釈尊に帰依し、釈尊を目標と

した祖師として知られており、曹洞宗のご本尊は釈尊とさだめられている。道元禪師の名著『正法眼蔵』九五巻のうちに、「袈裟功德」、「伝衣」の巻などがあり、袈裟は、釈尊にほかならず、仏教の真髓を体得し、これを継承することは袈裟のころを学ぶことであると説いている。道元禪師にあつては、釈尊と袈裟と道元禪師とは一体である。

かくて、通度寺の仏法興隆、世界平和実現の誓願と善光寺海外留学僧派遣育英会の仏法興隆、世界平和実現の誓願とが、ここに感応道交し、一本の強い絆となり、今回の贈呈がいち早く実現の運びとなった。

あらためて言うまでもなく、袈裟は仏教徒の標幟である。袈裟は、煩惱を離れ、罪を滅ぼし、人びとと世のなかの平安と幸いをもたらす功德をそなえていると經典に説かれている。この功德をいたぐたいて、智慧と慈悲をそなえた真実の

自己を実現し、あらゆるもののいのちを尊び、たがいに和合、和睦して、仲よく生きていくのが仏教である。

平成三年（一九九一）七月三〇日、午前一時、黒田武志理事長、佐藤俊明常任理事、東隆真理事、善光寺寺族黒田倫子女史の四名は、袈裟、絡子など四領、『正法眼蔵』一函を奉持して、通度寺に到着。午前一時より、大雄殿で老天下月下方丈をはじめ一山の清衆および老若男女の信者ら、およそ三〇〇名が堂内にあふれるなか、司会・釈梵河老師、通訳・李煥秀師（東洋大学留学。育英会生）のもとで贈呈式が行われた。その式次第は、1、三帰礼、2、般若心経奉読、3、来訪者紹介、4、贈呈（日本側、韓国側）、5、歓迎辞（韓国側）、6、答礼辞（日本側）、7、四弘誓願、8、記念撮影。贈呈する日本側として、導師を佐藤常任理事がつとめた。また、私が、今回の袈裟贈呈の意



義などについて二〇分ばかり講演した。韓国側を代表して、老天月下方丈と通度寺僧伽大学教授・金田山老師が、感謝の意と今後の親善、協調をのぞむ答礼の辞があった。

けだし、仏法の興隆、世界平和の実現を共通の誓願として、日本の仏教から朝鮮半島・韓国の仏教へ袈裟や祖録『正法眼蔵』が贈呈、奉獻されたのは、おそらく両国仏教史上はじめての出来事ではなかったかと思う。

おもえば、日本の仏教は、中国大陸、朝鮮半島から伝えられ、爾来一千数百年、言い尽くせぬ多大の恩恵を受けている。この恩恵を再認識し、これに応える意味からも、おたがいに積極的に理解し、協力することが必要であろう。とくに、私どもの曹洞宗は、朝鮮半島との仏教とはきわめて疎遠に過ぎたと言えるだろう。双方にとつてのぞましい交流は、ほとんどなかったのではあるまいか。これからはそうであつては

ならない。しかし、いま、新しい交流の第一頁ははじまったのである。

ところで、このたび、あらためて痛感したことがいくつもある。いずれ時を改めて書きたいが、とりあえず、二点を指摘しておく。その一つは、通度寺では現代韓国仏教でもっとも尊敬を集めている四大高僧のひとり、通度寺の老天月下方丈はじめ若い修行僧にいたるまで、すべての僧侶は、ねずみ色のころもの上に茶色の袈裟（木綿布か）をまとっている。例外はない。金襴の袈裟もなければ、茶色以外の色の絡子もない。まことに、すがすがしいばかりの光景である。もう一つは、通度寺の僧侶は、参詣人や信者から、たいそう尊敬されていると見た。僧侶に対する信者の敬虔な礼儀、作法、異邦からの客人である私たちをも肅然とさせるのであった。韓国仏教から教えられ反省させられることの多い旅でもあった。

てに伽僧山三角

